

# ソシュールの伝説・神話研究における 歴史の概念

金澤 忠信

## 1. 伝説・神話研究の基本方針および方法論

フェルディナン・ド・ソシュール [Ferdinand de SAUSSURE (1857-1913)]  
の未公開の手稿に次の文章を読むことができる。テキストの解釈に関わるので、  
抹消線を引かれた箇所および修正された箇所も必要に応じて再現するかたちで  
訳出を試みる。<sup>(2)</sup>

私たちの上方に広がる時間の限りなさは、ひとがそれについて何と言おう  
と、私たちの精神〈想像〉をあまり刺激しない。人間本性は、未来と折り  
合いをつけ、〈まさに必要に 必要なときに〉現在の色で未来〈それ〉を色  
づける方法を見つけ出すのが常である。七か七過去の深淵というものは、  
おそらく感覚を与える おそらくもともと与える 裂け目の〈計り知れな  
いもの〉感覚を与える。なぜなら、私たちの何も 投影されえない 自  
己投影する 幾世紀の遡及に、私たちの何も自己投影することができない  
からであり、また、あの限りなさは、私たちがなしで、絶対的に〈必然的に〉  
想像そのもののためにあるという特徴をもっているからである。<sup>(3)</sup>

- 
- (1) ソシュールの手稿を参照する際に用いられる「Archives de Saussure」はソシュール家からジュネーヴ図書館 [Bibliothèque de Genève] に寄託された資料を表す。また、「Ms. fr.」は「ジュネーヴ図書館蔵、フランス語手稿 (目録番号)」を表す。「f.」はばらばらになっている紙片 (に付された番号) を表す。
- (2) 以下、引用文 (訳文) において、〈 〉はソシュールによる加筆・修正、[ ] は手稿のなかで空白部分あるいは金澤による注釈を表す。
- (3) Archives de Saussure 382/5, f. 52.

当該の紙片は、資料の整理にあたったルドルフ・エングラー〔Rudolf ENGLER (1930-2003)〕による分類では「比較文法」に関する手稿群のなかに収められているが、前後の紙片とのあいだに明確な脈絡はなく、断章形式の文章になっている。

ここには「歴史」に対するソシュールのきわめて簡潔・明解な態度表明を読み取ることができる。人間というのは、現在自らもっている想像を未来に投影するかたちで、未来を現在の色に染め上げる。つまり未来には「私たち」の色がついている。あるいは端的に「私たち」がある。しかし、過去に「私たち」はない〔*sans nous*〕。何世紀過去（「上方」）に遡るとしても、過去の深淵はただひたすら「計り知れないもの」であって、現在の「私たち」による想像を過去に投影することはできない。「私たち」の想像によって過去を推し測るのではなく、限らない過去の深淵に対しては、「私たちがなし」の想像そのものが向き合わなければならない。

過去を「私たちがなし」に想像するというのは、ごく単純化して言えば、過去についての主観的で偏った想像を排し、過去において客観的な事実とみなされうるものを検証・確認するということである。ソシュールは伝説を研究対象として扱うにあたって、常にこのような態度と方法をもって臨むことになるのだが、それはソシュール独自の発想というよりも、同時代の歴史学者による影響があると考えられる。

教會的 キリスト教的起源をもち、〈まったく〉〈純粹に〉教會的な着想にもとづくある種の伝説は、ドイツ英雄伝説と同様、お人好しで情に厚いアッティラ像を私たちに提示している。アメデ・ティエリは興味深いこの種の例をまとめて引冊〈指摘〉しているが、ティエリが示しているように、〈明らかに〉神の懲罰としてのアッティラという考えにその源泉があり、結果、〈ひじょうに〉徳の高い王、ということになる。5世紀のゲルマン人たちの記憶というよりむしろ、そこに良きアッティラの伝説全体が由来するのではないか、それが ~~いつの間にか~~ 叙事詩に恐れ込んだ 次第に南

ドイツの叙事詩で〈かくのごとく発展した〉のではないか、ということを検討すべきかもしれない。——〈アッティラの〉ご立派な叙事詩には〈アトリが〉陰湿な拷問人として出てくるノルドの原典には、この特徴に相当するものがない。彼の特徴が平凡なものである『シーズレクのサガ』にもない。<sup>(4)</sup>

アッティラ [Attila (406?-453)] はフン族の王で (在位 434-453), 歴史上実在した人物だが, 上の引用文にもあるように, 『ニーベルンゲンの歌』, 『シーズレクのサガ』をはじめとするドイツおよび北欧の英雄叙事詩では, 「エッツェル [Etzel]」あるいは「アトリ [Atli]」の名で, 伝説上の人物として登場する。

ここでソシュールが参照しているのはアメデ・ティエリ [Amédée THIERRY (1797-1873)] の『アッティラとその後継者たちの歴史——ハンガリー人のヨーロッパへの定着まで』<sup>(5)</sup>である。ティエリはこの著作の序文で, アッティラを歴史的人物というより伝説的人物のような存在としてとらえてきた従来の「幻影 [fantasmagorie]」を排して, 「人間アッティラ」に迫り, 「現実」における描写を試みたと述べている。ティエリによれば, ラテン民族の伝説はほぼすべて教会的 [ecclésiastiques] であり, アッティラの歴史的役割を評価する際に, それらの伝説に頼りすぎると, 歴史の実情からほど遠い説明になってしまう。また, 伝説上のフン族の王は, 墮落したローマ人たちを懲らしめるために神によって遣わされた苦痛と破壊のメシアとして登場するが, このような「神秘的な視点」が支配的になると, 「人間アッティラ」は消失し, 「神の懲罰 [le fléau de Dieu]」という「象徴 [un symbole]」あるいは「神話的人物 [un mythe]」に取って代わられてしまう。ただし, ティエリは伝説を完全に切り捨てるわけではなく, 「出来事についての細部 [détails sur les événements]」や, フン族と

(4) Archives de Saussure 382/5, f. 35.

(5) Amédée THIERRY: *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, vol. 1, Didier, Paris, 1856.

の戦いの「宗教的特徴〔*caractère religieux*〕」（フン族はキリスト教徒のローマ人にとって異教徒だった）、そして歴史からほとんど忘れ去られ粗雑な仕方ではしか描かれてこなかった重要人物などに関する証拠資料としての価値を伝説に見出している。

ソシュールも触れているように、アッティラは、いくつかのゲルマン叙事詩においては、平和を好み、ゲルマン人たちを厚遇・援助する善良な王として現れるが、フン族内部での行動や、ひとりの女性の手で殺害されることなど、北欧の伝説には残酷な要素が認められる部分もある<sup>(6)</sup>。民族、地域、時代などに応じて、叙事詩の諸異本のあいだで、あるいはいくつかの民間伝承のあいだで、アッティラ像が様々に異なるのはなぜかということが問題となるわけだが、これに対してティエリはひとつの解釈の仕方を提示する。

ティエリによれば、アッティラにまつわるハンガリーの伝承は、「人間アッティラ」を知るために直接役立つわけではなく、まずはフン族（特にその末裔とされるマジャール人）がヨーロッパに定着していった時代の精神を理解するのに役立つ。ローマ人やローマ化したゲルマン人にとってフン族が異教徒だった時代には、アッティラは「神の懲罰」だったが、フン族がキリスト教に改宗した後は、フン族の「魂の権化」としての姿は保持しつつ、ハンガリーにおけるキリスト教の「開祖」あるいは「先駆者」として生まれ変わった。そうして、時代を経るにつれ、民衆の間でアッティラ像は多様化をきわめていくのだが、このような「猛烈な空想〔*ardents fantaisies*〕」の状態にあっても、人間精神は理由なくさまよっているわけではないとティエリは考える。一見矛盾している言葉であっても、それぞれの「誤謬〔*erreur*〕」の根底には真実が隠されている。それゆえ、アッティラにまつわる伝説・伝承を、「人間アッティラ」の歴史的研究に必要な補足資料とみなし、そうした伝説・伝承について相応の研究をする、ということになる。<sup>(7)</sup>

(6) Cf. Ms. fr. 3959/4, f. 12. [フェルディナン・ド・ソシュール, 『伝説・神話研究』, 金澤忠信訳, 月曜社, 2017年, 28-29頁]

(7) *Histoire d'Attila et de ses successeurs*, p. IX.

こうしたティエリの研究姿勢がソシュールの伝説・神話研究の基本方針および方法論に少なからぬ影響を及ぼしていることはほほまちがいないだろう。「猛烈な空想」によって「誤謬」を散りばめられた荒唐無稽な伝承・伝説、すなわち「幻影」の背後に、歴史上の人物が当時置かれていた歴史的状況を読み取ろうとし、そのために「細部 [détails]」および「特徴 [caractère]」を最重要視する手法は、直接ティエリを援用していると言っても過言ではない。

ティエリがアッティラにまつわる伝説・伝承を補足資料として利用しながら、歴史的人物としてのアッティラの実像に迫ると同様に、ソシュールは『ニーベルンゲンの歌』の「出来事についての細部」をひとつひとつ検証しながら、この英雄伝説の元になったと想定される歴史的事実を探り出し、ジークフリート [Sigfrid] の実像に迫ろうとする。ただし、アッティラが実在した人物であること自体は疑われていないのに対して、ジークフリートは伝説上の人物であり、歴史上実在した人物とは認められておらず、事態は複雑かつ困難になる。

## 2. ジークフリート／ジゲベルトあるいはジゲリック

歴史上のブルグント国は、413年に中部ライン地方に建国され（ウォルムス王国）、437年にフン族によって滅ぼされた。『ニーベルンゲンの歌』の物語はウォルムスが舞台となっており、ブルグント国滅亡という歴史的事実がドイツおよび北欧の英雄伝説の成立になんらかのかたちで関与したと推測される<sup>(8)</sup>。だが、ソシュールによれば、437年頃に実在したブルグント族の人物と伝説上の人物とのあいだに名前的一致ないし類似は認められない<sup>(9)</sup>。

時代と地理は多少とも異なるが、名前的一致・類似が認められるケースを、ソシュールは二つあげている。一つ目は、メロヴィング朝フランク王国のアウストラシア王ジゲベルト1世 [Sigebert I<sup>er</sup> (535?-575)] である。ジゲベルト／ジークフリート [Sigebert / Sigfrid] の類似だけでなく、ジゲベルトの妻の名は

(8) Cf. 『ニーベルンゲンの歌』(前編), 石川栄作訳, ちくま文庫, 2011年, 9, 11頁訳注。

(9) Ms. fr. 3958/4, p. 40v; Cahier Saussure, L'Herne, Paris, p. 375. [『伝説・神話研究』, 42頁]

ブルンヒルド〔Brunchaut (547?-613)<sup>(10)</sup>〕であり、これも伝説上のブリュンヒルデ〔Brünhilde〕と酷似している、あるいはほぼ一致していると言ってよいだろう。しかし、人物の特徴ないし役割を考慮に入れると、伝説上のジークフリートとブリュンヒルデは、一度偽装したかたちで関係を持つ（ジークフリートはブルグント王グンテルとブリュンヒルデの共寝の手助けをする）ものの、正式な夫婦ではない。また、伝説上では、グンテル王の妹でジークフリートの妻クリームヒルト〔Kriemhild〕がグンテル王の妃ブリュンヒルデと口論になるが、歴史上では、ブルンヒルドと争ったのは、ジゲベルトの義理の妹フレデグンド〔Frédégonde (?-597)〕である。

フレデグンドは、ジゲベルトの弟でネウストラシア王のキルペリク1世〔Chilpéric I<sup>er</sup> (?-584)〕の最初の妃の召使だったが、キルペリクの寵愛を受け、策を弄してこの王妃を追放した。だがキルペリクは、兄ジゲベルトが西ゴート王国の王女ブルンヒルドと結婚したことに倣い、ブルンヒルドの姉ガルスヴィンタ〔Galswinthe (?-568)〕を二番目の王妃として迎える。結婚後まもなくガルスヴィンタは扼殺された状態で寝室で見つかる。そしてフレデグンドは三番目の王妃におさまるのだが、ここからガルスヴィンタの妹ブルンヒルドとフレデグンドとのあいだで、40年以上にわたり、双方の一族郎党を巻き込んだ血で血を洗う抗争が繰り返されることになる。この抗争の一環で、575年にヴィトリ〔Vitry〕（フランス北部・パ＝ド＝カレ県）でジゲベルト暗殺事件が起こる。仮に、歴史上のジゲベルトとブルンヒルドのカップルが伝説に取り入れられたのだとすると、両者の役割には明らかに「転位」（夫婦→義理の姉弟）が生じているが、「暗殺」されるという点ではジゲベルト（歴史）とジークフリート（伝説）のあいだに一致が認められる。

名前の一致・類似の二例目は、メロヴィング朝期ブルグンディア（リヨン王国）の王子ジゲリック〔Sigéric [Ségéric] (?-522)〕である。ソシュールはジ

(10) ソシュールは歴史上の人物を主にフランス語で表記している。なお、「?」を含む生没年は世紀・年代を表すおおよその目安であり、かならずしも正確でない場合がある。以下同様。

ゲベルトよりもこちらのほうをより詳細に検討しており、やはり伝説上のジークフリートの死に対応していると想定される歴史的事実として、522年にリヨンで起こったジゲリックの暗殺<sup>(11)</sup>をあげている。ウォルムス王国の時代からはおよそ1世紀ずれているが、地理的には一応ブルグンディア地方なので、多少とも一致は認められる。ただし、歴史上の人物であるジゲリックの父ジギスムント〔Sigismund (? -523)〕がブルグント国(リヨン王国)の王であるのに対し、伝説上の英雄ジークフリートの父ジークムントはニーデルラント国の王であり、英雄はブルグンディア(ウォルムス)で、叙事詩として生き、そして死ぬ。また、伝説上のブルグント王の地位はグンテルが占めている。

時代、地理、人物の特徴・役割になんらかの「転位」はあるものの、ソシュールは、「テキストに忠実な姿勢を崩さないこと」を前提条件に、『ニーベルンゲンの歌』のなかに、歴史にたいするとんでもない宝庫をもつことにはなるまいか<sup>(12)</sup>という「大胆な歴史的結論」を導く。伝説は「純粋な空想の産物」ではなく、歴史的事実を下地として成立し、伝わる。それゆえ、伝説における「豊かな細部」によって、<sup>イストワール</sup>歴史の「穴」を埋め合わせることができるかもしれない。こうしてソシュールは、ほぼ同時代の年代記者によって収集される「事実」が伝説的説話の下地になっていると想定し、6世紀のブルグント王国(リヨン王国)に言及しているトゥールのグレゴリウス〔Grégoire de Tours (538-594)〕に着目するのである。

### 3. 出来事についての細部

#### —— 宗教・王権・装飾品・口論

トゥールのグレゴリウスによれば<sup>(13)</sup>、ブルグント王グンドバット〔Gondebaud (? -516)〕の死後、息子のジギスムントが王位を継承する。ジギスムントは東

(11) Ms. fr. 3958/4, pp. 49v-50; *Cahier Saussure*, pp. 373-374. [『伝説・神話研究』, 38-39頁]

(12) Ms. fr. 3958/2, p. 4; *Cahier Saussure*, pp. 362-363. [『伝説・神話研究』, 23頁]

(13) この段落は、特にソシュールの注釈に関わる部分を取りあげるかたちで、トゥールのグレゴリウス、『フランク史——一〇巻の歴史』, 杉本正俊訳, 新評論, 2007年, 110-111頁を要約している。

ゴート王テウデリク〔Théodoric (455?-526)〕の娘である先妻に先立たれ、新妻を迎えていた。先妻とのあいだに生まれた息子がジゲリックである。新妻は継母の常でこの子をいじめた。あるときジゲリックは、死んだ実母の服を継母が身につけているのに気づき、憤激する。「おまえはその服を着るのにふさわしい人じゃない。それは僕の母でお前の主人のひとの服だったんだ」。これに対して新妻は、あの邪悪な子はあなたを殺して王国を所有し、さらに自分の祖父テウデリク（大テオドリク）の王国にまで領土を拡大しようとしていると言って夫を煽りたてる。ジギスムントは新妻に乗せられて子殺しを行う。彼はワインに酔った子供に午睡するよう指示し、眠った子供の首の下に汗拭き布を敷いて、それを顎の下で結び、左右から二人の従僕に引かせて絞殺した。ジギスムントはすぐに後悔の念に襲われ、死体の上に身を投げ出して泣き崩れる。そして自らが建立したアカウネンセの修道院で何日も何も食べずに泣き暮らし、神の許しを乞う。同所に常設の聖歌隊を設立して彼はリヨンへ帰るが、神の復讐が彼を追いかけ、自身も非業の死を遂げる。

ブルグント王国でのこの一連の出来事について、トゥールのグレゴリウスはあまり正確でない情報しかもっていないとソシュールは見ており、グレゴリウスはよその土地であるブルグンディアの事情のほうをむしろよく知っていたとする歴史家ゴドフロワ・キュルト〔Godefroid KURTH (1847-1916)〕の考察をおよそ信用できないと批判している。また、<sup>(14)</sup>「宗教的特徴」として、トゥールのグレゴリウスはカトリックの司教であるので、彼の立場・視点からすると、もともとアリウス派だったブルグント族にあってアタナシウス派（カトリック）に改宗したジギスムントのことを多少とも好意的に解釈する傾向があったと推測される。仮に、こうした視点が支配的であった時代が、伝説がまだ何も形作られていない、歴史と伝説の端境期にあたるとするなら、ジギスムントは犯行直後に悔悛する暗殺者であり、その壮絶な死（自身暗殺され、井戸に突き落とされる）によって子殺しの罪を償ったとみなされ、カトリック教会

(14) Ms. fr. 3959/4, p. 33; *Cahier Saussure*, p. 367. [『伝説・神話研究』, 30頁]



によって神聖化されるだけに、伝説のなかでジギスムント（ジークムント）がジゲリック（ジークフリート）の父にして暗殺者に仕立て上げられるには難があったと考えられる。こうして、ブルグント王はグンテルに置き換えられ、ジークムントは父王としての役割のみを担い、暗殺（子殺し）は行わない。ソシュールの用語で言えば、ジギスムントという歴史的人物は、伝説のなかで「二重化」（グンテル／ジークムント）したのである。<sup>(15)</sup>

トゥールのグレゴリウスは、ジギスムントによるアカウネンセ（アゴース、現スイス、サン・モーリス）の修道院および聖歌隊（ソシュールの言い方では「連禱 [litanie]」<sup>(16)</sup>）の創設を、ジゲリック暗殺のあとに行われた行為として表している。すなわち、トゥールのグレゴリウスにおいて、修道院と連禱の創設は、いずれもジゲリックが死んだ522年の出来事であり、悔恨の念にかられた父が、息子を偲び、神の許しを乞うための「贖罪の記念碑」という意味をもっている。<sup>(17)</sup> これに対しソシュールは、エミール・エグリ [Emil EGLI (1848-1908)] 『カール大帝までのスイスの教会史』<sup>(18)</sup> を参照しながら、トゥールのグレゴリウスとほぼ同世代のアヴァンシュのマリウス [Marius d'Avanches] が残した年代記と、7-8世紀イングランドの聖職者・歴史家ベダ [Beda Venerabilis (672/673-735)] の『ジャロー修道士の歴史』 [Historiam abbatum monasterii huius] とを比較検討し、ジギスムントによるアカウネンセ修道院と連禱の創設年代が515年であることを突き止める。これはジギスムントが王位を継承する1年前であり、ジゲリックが暗殺される7年前である。<sup>(19)</sup> これによって、「贖罪の記念碑」

(15) Ms. fr. 3958/4, f. 5v; *Cahier Saussure*, p. 368. [『伝説・神話研究』, 31頁]

(16) トゥールのグレゴリウスにおいてはジギスムントがジゲリックを暗殺したあとにアカウネンセの修道院と連禱を創設したとソシュールは読んでいるが、実際『フランク史』では、修道院創設は王位継承のあと、聖歌隊創設はジゲリック暗殺のあととなっている。Cf. 『フランク史』, 110-111頁。

(17) Ms. fr. 3959/11, f. 149; *Cahier Saussure*, p. 423. [『伝説・神話研究』, 118-119頁]

(18) Emil EGLI: *Kirchengeschichte der Schweiz bis auf Karl den Grossen*, A. D. Schweiz, Zürich, 1893.

(19) Ms. fr. 3959/11, f. 149; *Cahier Saussure*, pp. 423-424. [『伝説・神話研究』, 119頁] Cf. 金澤忠信, 「ソシュールの伝説・神話研究」, 『21世紀のソシュール』, 松澤和宏編, 水声社, 2018年, 165頁。

の創設という意味は無効になる。ジギスメントはジゲリック暗殺のあと、アカウネンセ修道院で悔恨と贖罪の日々を過ごしたのかもしれないが、修道院と連禱はそのときすでに創設されていたことになる。トゥールのグレゴリウスは、ジゲリックの死のあとで聖歌隊（連禱）が創設されたことを明示しているので、翻って、そもそもジギスメントが悔恨と贖罪の日々を過ごしたこと自体が歴史的事実であるかどうかを疑う余地はじゅうぶんある。

ソシュールによる「出来事についての細部」の検証作業はジゲリックの死のそのものにおよぶ。トゥールのグレゴリウスによれば、ジゲリックが暗殺されるにいたる直接的な原因は、ジギスメントの第二夫人の怨恨あるいは憤怒の感情である。だが当時の政治的状況を考慮に入れると、暗殺事件は少なくとも単純な心理劇などではなくなる。

ジゲリックの実母、すなわちジギスメントの第一夫人（テウデゴタあるいはオストロゴタ）は、東ゴート王国の大テオドリック王の娘である。ジギスメントの第二夫人は、王家にはふさわしくない生まれのローマ人女性であったとされる。やはり「宗教的特徴」として、アリウス派の大テオドリックの孫であるジゲリックと、カトリックに改宗したジギスメントとローマ人の第二夫人という対立図式があり、非カトリックのブルгент人の残党にとって、ジゲリックは希望の星だったはずである。ジゲリックは継母からいじめられ、無能な父ジギスメントから除け者にされる一方で、自らがブルгентの生まれであり、古参のブルгент人たちから熱烈に支持され、さらに母親が高貴な生まれで隣接する東ゴート王国の遺産相続権を有していたため、三重、四重にも自らの王位継承権を自覚した<sup>(20)</sup>。

「宗教的特徴」を含むこれらの歴史的事実のほか、もうひとつ見過ごすことのできない「細部」がある。もともとブルгент王国の王位継承は、王子たちのあいだで領土と王権を分有するかたちで統制されていた。しかし、グンドバットの治世に突如として大きな変化を被る。いわゆる「グンドバット法」の

(20) Ms. fr. 3958/4, ff. 13-14; *Cahier Saussure*, pp. 371-372. [『伝説・神話研究』, 37-38頁]

制定である。これによって王国は分割されず、一人の王が統治することになった。グンドバットは、彼自身の三人の兄弟とそれぞれの家系が自然に途絶えてしまったため、たまたま唯一の王になったのだが、この自身の例をモデルにして王権の再組織化を図ったとソシュールは考えているようである。<sup>(21)</sup>

このグンドバットの改革によって最大の不利益を被った人物は、ジギスムントの弟でジゲリックの叔父にあたるゴドマル〔Godomar (?-534)〕である。ゴドマルにとって「グンドバット法」の制定およびジギスムントの王位継承式典は、王権分有というブルグント的伝統の廃止および自身の王位継承権の剥奪を意味する。そして王位が一子相伝になったからには、ジギスムントの次の王になる優先権はジゲリックがもつことになる。ここからソシュールは、ジゲリック暗殺の真の首謀者を含む歴史的真相を導き出す。ジギスムントの第二夫人は、ジゲリックに関して利害の一致する義理の弟ゴドマルの支持をとりつけ、結託した。ジギスムントが自分の子供を手にかけてのではなく、おそらくジギスムントの同意を得て、継母の侮辱を晴らすという口実で、ゴドマルがジゲリックを暗殺した、あるいはゴドマルが家来にジゲリック暗殺を指示した。<sup>(22)</sup> 果たして翌523年、ジギスムントも暗殺されたあと、ゴドマルがブルグント王の座につく。

ソシュールはこのような大胆な歴史的仮説を提示したうえで、これらの出来事および人物たちの特徴が伝説にどのように取り入れられたのか、あらためて検討を試みる。上で見たように、伝説は「純粋な空想の産物」ではなく、また一度に、一気に出来上がるものではない。ソシュールの想定では、歴史から伝説へのあいだには、歴史的事実についての年代記あるいは叙事詩が存在して

(21) グンドバットは存命中に長男ジギスムントを王位につけ、ジュネーヴの市外区クェドルウィウム（現カルージュ）で、おそらく516年9月に式典が挙行されたとソシュールは述べている。ちなみに、カルージュには「ジギスムント広場」と名付けられた場所はあるが、特に記念碑や遺跡などはない。Ms. fr. 3958/4, f. 7; *Cahier Saussure*, p. 369. [『伝説・神話研究』, 33頁]

(22) Ms. fr. 3958/4, ff. 6v-7; *Cahier Saussure*, pp. 368-369. [『伝説・神話研究』, 32-33頁] Cf. 金澤忠信, 「凡庸さとありきたりなもの」, 『ユリイカ』「総特集・蓮實重彦」10月臨時増刊号, 青土社, 2017年, 368頁。

いる。

ジゲリックはジュネーヴで成長したのだが、彼の葬儀はアカウネンセの聖堂で営まれたので、この直前あるいは直後に作られたはずの「ブルグント叙事詩」は、ジゲリックを「アカウネンセの聖堂で生まれた者として描写していた可能性がある」とソシュールは指摘している。<sup>(23)</sup>つまり、生まれた場所と成長した場所が異なるという状況が、なんらかの変化（地理的・時代的「転位」）をともなっていて、英雄はニーデルラントで生まれ、ブルグンディア（ウォルムス）で活躍するという筋立ての伝説の下地になったのではないか、ということである。また、高貴な生まれの実母を亡くし、第二夫人の言うがままになる父王から蔑ろにされ、政敵の罠にかかる若き王子は、やはり「ブルグント叙事詩」のなかですでに「我が名は気高き獣なり [*Ek heiti gofugt dýr*]<sup>(24)</sup>」と言い、それがそのまま北欧の英雄伝説に取り入れられたのかもしれない。さらに、伝説において、「装飾品」を発端とし、誰が「主人」で誰が「従僕」なのかについてなされる「口論」の場面も、年代記のなかにその原形に近い説話が含まれていると考えられる。

トゥールのグレゴリウスにもとづくソシュールの推測<sup>(25)</sup>では、ジグスムントの宮廷（数年前までは先代のグンドバットの宮廷であり、伝説上ではグンテルの宮廷にあたる）でなんらかの式典が行われた際、ジゲリックは、実母のものだった服を継母が身につけているのを見て激昂し、「おまえはその服を着るのにふさわしい人じゃない。それは僕の母でお前の主人のひとの服だったんだ」と言った。『ニーバルンゲンの歌』のなかで問題となる「装飾品」は「指輪」と「帯」であるが、おそらく「指輪」は事後的な加筆で、もともとは「帯」のみだった。いずれにしても、それを身につけるのはジークフリートの妻（クリームヒルト）なので、『フランク史』とは事実上ずれが生じている。しかし、ジークフリートにとってのブリュンヒルデは（クリームヒルトに言わせると）

(23) Ms. fr. 3958/4, f. 114v; *Cahier Saussure*, p. 380. [『伝説・神話研究』, 50頁]

(24) *Ibid.* [『伝説・神話研究』, 51頁] Cf. 『ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ』, 菅原邦城訳・解説, 東海大学出版会, 1979年, 51頁, 169頁訳注。

(25) Ms. fr. 3958/4, f. 115; *Cahier Saussure*, p. 380. [『伝説・神話研究』, 51頁]

「従僕」であり、しかも説話のなかでの役割としては暗殺を企む「策士」であるので、特徴・地位・行為の観点では、ジゲリックにとっての継母とずれるはないとソシュールは認識している。<sup>(26)</sup>

また、ソシュールによれば、『ニーベルンゲンの歌』第14歌章の「口論」の場面でクリームヒルトがブリュンヒルデのことを、国王の妃でありながら「側女」<sup>そばめ</sup>になったと罵ったのは、年代記において、「正規の結婚をせず」ジギスムントの第二夫人におさまった身分の卑しいローマ人女性に対してジゲリックが言い放った言葉が下地になっている。<sup>(27)</sup> 伝説において「口論」をするのは二人の女性（クリームヒルトとブリュンヒルデ）だが、ジークフリートはまったく無関係というわけではなく、ブリュンヒルデに泣きつかれたグンテル王に呼び出され、自身も争議に巻き込まれてしまう。このくだりは、英雄という人格に鑑みればかならずしも必要ではなく、むしろ英雄伝説の偉大さを損ねてしまっている。<sup>(28)</sup> しかもこれは第16歌章の「私たちに恨みを抱いているような敵はここにはいない。そなたの親せきは皆、私に好意を抱いてくれている」という部分と明らかに矛盾する。にもかかわらず問題のくだりが英雄伝説に収録されたままになっているのは、ジークフリートのモデルとなった人物についての叙事詩あるいは年代記においてすでにそのような説話が存在し、もともとは当該の人物（ジゲリック）が「口論」の当事者だったのだが、伝説ではできるかぎり英雄らしさを保持すべく、「口論」は二人の女性にさせることにし、英雄はその場面のいづらか後景に退いたけれども、完全に消え去るわけにはいかなかったから、と推測される。

このように、ソシュールは年代記が伝説の基盤になっていると想定し、「トゥールのグレゴリウスの文章のなかにきわめて近い形で現れないような『ニ

(26) このような比例式  $A : B = C : D$ （ジゲリック：継母＝ジークフリート：ブリュンヒルデ）による類推（関係の類似性）を考慮するならば、伝説・神話研究、印欧歴史比較言語学および一般言語学との共通性・関連性を認めることも可能かと思われるが、ここでは示唆するだけにとどめる。

(27) Ms. fr. 3958/4, f. 114. [『伝説・神話研究』, 130頁, 訳注22]

(28) Ms. fr. 3958/4, f. 6; *Cahier Saussure*, p. 368. [『伝説・神話研究』, 32頁]

(29) 『ニーベルンゲンの歌』（前編）、石川栄作訳、ちくま文庫、2011年、282頁。

ーベルンゲンの歌』論争の発端となっている点はひとつもない」とまで言っている。<sup>(30)</sup>たとえトゥールのグレゴリウスの叙述が厳密さを欠き、「宗教的特徴」によってなんらかの潤色の痕跡が認められるとしても、この年代記の基盤に詩的テキストあるいは詩化された伝説があるとはソシュールは考えない。むしろ年代記のほうが民間伝承と呼ばれるものの根本的な形式であり、詩的伝説の形式にとって前提となる形式のひとつだと考えるのである。<sup>(31)</sup>

#### 4. 出来事についての細部 —— 狩り・ベッド・ワイン

英雄伝説の基盤をなしていると想定されるトゥールのグレゴリウス『フランク史』において、ブルグント王子ジゲリックはワインを飲んで酔い、父王に午睡するよう促され、寝室で絞殺される。陰謀を企てたのは継母である。北歐の英雄伝説『シーズレクのサガ』では、英雄シグルズが「狩り」から戻ってくる最中にブリュンヒルドが陰謀を企てる。そしてもう一度「狩り」の場面があり、そのあと英雄が城館に帰還し、暗殺が実行される。ソシュールは、原初的な伝説を推定する一環で、「狩り」の場面に付加的な詩的演出を見出す。ブリュンヒルドの陰謀をはさんで言及される二つの「狩り」の場面のうち、片方だけが原初の説話を構成していたはずだが、『シーズレクのサガ』に依拠するだけでは、<sup>(32)</sup>どちらが原初版でどちらが外典か判別することはできない。ノルド異本を参照すると、<sup>(33)</sup>今度は「狩り」の話がまったく出てこない。シグルズはベッドで眠っているあいだに、グトルムル（ブリュンヒルドの義理の弟）に剣で突き刺されて死ぬ。このように、諸異本間の差異を考察することを通じて、ソシュールは自らの伝説・神話研究における解釈の根本原理を見出す。

ヴォルスング族の息子が自分のベッドで死ぬ。この死はそれだけで巨大

(30) Ms. fr. 3958/4, f. 115; *Cahier Saussure*, p. 380. [『伝説・神話研究』, 51頁]

(31) Ms. fr. 3959/11, f. 124; *Cahier Saussure*, p. 424. [『伝説・神話研究』, 119-120頁]

(32) Ms. fr. 3958/4, f. 9; *Cahier Saussure*, p. 370. [『伝説・神話研究』, 34頁]

(33) 『ヴォルスンガ・サガ』においても、シグルズ暗殺計画の前後に狩りの話はまったく出てこない。Cf. 『ゲルマン北歐の英雄伝説 —— ヴォルスンガ・サガ』, 104-108頁。

な文学を生んだ。自分の寝室で休んでいる男にたいして遂行されるおぞましい暗殺以上に、偉大な叙事詩と矛盾するものはありえないのだから、それは当然である。しかし批判的観点から事態を判断すると、こう断定せざるをえない。すなわち、二つの異本があって、ひとつはジークフリートを狩りの最中に息絶えさせ、もうひとつは彼の部屋で、彼のベッドのなかで死なせるなら、より古いものとみなすべきなのは後者のほうである。——なぜかという、この程度の叙事詩的出来事には、詩趣喪失〈装飾欠如〉<sup>(34)</sup>を認めることができないからである。

英雄が寝室で眠っているときに暗殺されるのは、偉大な叙事詩にはそぐわない。だからこそ、このような「詩趣喪失」が英雄叙事詩にあとからわざわざ付け加えられたとは考えにくい。つまり、この出来事は、伝説のはじまりから、あるいは伝説以前から、もともとあったと考えられる。共謀はジークフリートが「狩り」に出ている最中に成立したのかもしれないが、仮にそうだとすると、そのことは暗殺自体にとって本質的な要素ではない。実際の犯行現場は寝室の「ベッド」であり、英雄は「狩り」の最中ではなく、眠っているあいだに殺害された。伝説は、英雄を英雄たらしめるべく、英雄らしからぬ「真実」を伏せる一方で、もともとは付随的事態だったものの、英雄の特徴や行為に見合うような要素に着目し、むしろそれのほうを前面に押し出す。このような「猛烈な空想」によって再構成された説話には、一見したところ矛盾があるのだが、「誤謬」の根底には歴史的眞実が隠されている。その隠された眞実を「詩趣喪失」の原理にもとづいて探究するのがソシュールの伝説・神話研究の基本方針と言える。

この基本方針に沿って、「ベッド」と同様の考察が「ワイン」についてもなされる。<sup>(35)</sup>『フランク史』において、ジゲリックは「ワイン」を飲んだあとに殺

(34) Ms. fr. 3958/4, f. 10; *Cahier Saussure*, p. 370. [『伝説・神話研究』, 35頁] Cf. 金澤忠信, 「ソシュールの伝説・神話研究」, 『21世紀のソシュール』, 松澤和宏編, 水声社, 2018年, 158頁。

(35) Ms. fr. 3958/4, f. 11; *Cahier Saussure*, p. 371. [『伝説・神話研究』, 35-36頁]

害されるが、『ニーベルンゲンの歌』では、ほぼすべての異本において、ジークフリートが殺されるのは清らかな「泉」で喉を潤している時である。この「泉」の場面も、英雄の死を「詩的な光輪」<sup>ニンプス</sup>で飾り立てるための付加的創作であるとソシュールは考える。英雄が酔い潰れたあとに死ぬのは、やはり偉大な叙事詩にふさわしくないからである。

『シーズレクのサガ』では、王が料理人に食事を塩辛くするよう命令する場面がある。それによってジークフリートが水を飲む行為は自然になるが、命令自体の目的が何でありうるのかがわからない。また、『ニーベルンゲンの歌』では、ジークフリートが喉の渇きに堪えられなくなっているにもかかわらず、泉まで競走する場面があり、これもその必然性がわからなくなっている。問題の『ニーベルンゲンの歌』第16歌章において、「競走」と「泉」の場面の直前に「狩り」と「食事」の場面があり、そこでジークフリートはワインを所望するのだが、ハーゲンとグンテル王の企みによってワインを運ぶ酌人がおらず、そのため近くの泉で喉の渇きを癒すという筋立てになっている。ソシュールはまず、英雄が「水」を見つけることなく「ワイン」で喉の渇きを癒すようになっている異本のほうが、より年代記に近く、より原初的な伝説であると想定したうえで、もともとハーゲンとグンテル王はジークフリートにワインを飲ませようとする意図をもっており、実際にワインを飲ませ、そして酔い潰れて眠っている英雄を殺害したという「真実」を読み取る。これは、トゥールのグレゴリウスが語るジゲリック暗殺直前の場面とほぼ一致する。これにソシュール独自の解釈を加味すると、「英雄」ジークフリートのモデルと目される「人間」ジゲリックは、ワインを飲んでベッドで眠っているあいだに、利害の一致から共謀した継母と叔父ゴドマルによって暗殺された、ということになる。

## 5. 結論に代えて —— 歴史と伝説

伝説は歴<sup>イストワール</sup>史にもとづいているというのが、ソシュールの伝説・神話研究の前提条件であり、最終的な結論でもある。ホメーロスの叙事詩『イーリアス』に「真実」を読み取って伝説のトロイアを発見したシュリーマン〔Heinrich



SCHLIEMANN (1822-1890) を引き合いに出しつつ、ソシュールは「ひとつの叙事詩的説話が細部に至るまで現実の出来事を再現していたかもしれないという可能性」<sup>(36)</sup> をけっして排除しない。ドイツの国々で、9世紀の『ルートヴィヒの歌』〔*Ludwigslied*〕をはじめ、三十年戦争 (1618-1648年) の時代にいたるまで、「歴史的な詩」すなわち「韻文的年代記」がずっと生み出されてきたことに鑑みれば、「アプリアリに叙事詩は、細部にいたるまで、歴史的であるあらゆる機会<sup>チャンス</sup>をもつ。そうであることを証明し、細部を確認することが問題となる」<sup>(37)</sup>。ソシュールによれば、たとえばナポレオン1世の治世に、征服者あるいは被征服者のもとでまずはじめに叙事詩が成立し、そこで語られる君主の結婚、不幸な出来事、戦勝などの挿話が、何世紀か時代を経ると歴史的事実と見分けがつかなくなり、最終的に歴史的なもののみなされるようになる、などと想定するのは転倒した論理である。叙事詩的説話の原初形態は「韻文的年代記」であり、そこで語られる挿話は、当該の出来事の当事者あるいはそれを見聞きした者の記憶をひとつひとつ忠実に再現しようとしている<sup>(38)</sup>。

ただし、原初形態の叙事詩的説話が「現実の出来事を再現」しているというのは、やはりあくまで「可能性」あるいは「機会<sup>チャンス</sup>」にすぎない。それが「真実」であることを証明するために、「細部」を確認しなければならない。「神秘的な視点」によって生み出された「幻影」（「象徴」、「神話的人物」）を排して現実の「人間」に迫り、「猛烈な空想」による「誤謬」を取り除いたあとになお残るむき出しの「真実」を見出さなければならない。その際、私たちの想像によって過去における現実の出来事を推し測るのではなく、過去の深淵に対しては、「私たちがなし」の想像そのものが向き合わなければならない。「私たちがなし」に過去の「真実」を探求するこのソシュールの姿勢は、6世紀のブルグント王国で起こった出来事について述べている年代記に対しても、数ヶ月前の出来事について述べている新聞記事に対しても、ほとんど変わらないように見える。

(36) Ms. fr. 3959/11, f. 155; *Cahier Saussure*, p. 426. [『伝説・神話研究』, 123頁]

(37) Ms. fr. 3959/11, f. 2; *Cahier Saussure*, p. 424. [『伝説・神話研究』, 119頁]

(38) Ms. fr. 3958/4, p. 62v; *Cahier Saussure*, p. 375. [『伝説・神話研究』, 43頁]

私はレヴィルの話に好意を寄せようとしてみたものの、それはまったく私の心を捉えなかった。お利口な男の子がママに手紙を書いていると言ってもいいようなこの文書は何なのかと私は訝しく思う。まず二つのことのうちの一つは、レヴィル氏がレヴィル氏の名で書いている、ということである。私は文章の冒頭に掲げてある賛辞を読んだが、この賛辞を伴い、著者名が伏せられているこの記述が何を意味していたのかが問われるところである。それとも、彼は本当に友人の手帳を転載しているのか。その場合レヴィルはどのように署名しているのか。——著者にまつわる不確定さは、著者が有しているように見える興味深さをこの日記から奪っている原因の一つである。そのきわまりない子供っぽさが第二点目である。しかしさらに第三がある。

この日記が日ごとに、指示されている日付に執筆されたということを、私はきわめて疑わしいと思ってしまう（私はれっきとしたドレフュス主義者であるが）。私はそれについての明らかな証拠をすでにいくつか収集したが、その数は日を追うごとに増えている。一つの批判にたいしてさらなる批判が加えられる。真実を愛する者はみなドレフュスの勝訴を望むだろうが、そのために真実が犠牲になってはならない。

いずれにしろ、仮に私が間違っているにせよ、なぜレヴィル氏は半分しか署名していないのか。<sup>(39)</sup>

ここでソシュールが言及しているのは、ドレフュス事件の際、フランスの神学者アルベール・レヴィル〔Albert RÉVILLE (1826-1906)〕が、当時パリで発行されていた『シエークル』紙〔*Le Siècle*〕に1898年5月19日から連載した『ある知識人の行程』<sup>(40)</sup>である。この日記形式の連載記事は同年一冊の書物にまとめられ出版されている。ソシュールが伝説・神話研究に本格的に着手するの

(39) Archives de Saussure 371/2, f. 12. [金澤忠信, 『ソシュールの政治的言説』, 月曜社, 2017年, 88-89頁]

(40) Albert RÉVILLE: *Les étapes d'un intellectuel — À propos de l'affaire Dreyfus*, P.-V. Stock, Paris, 1898.

はおそらく1903年頃なので、当該の手稿はその5年ほど前に書かれたことになる。

レヴィルの序文によれば、『ある知識人の行程』はもともとレヴィルの「古い友人」が書いた手記であるが、匿名を条件に新聞掲載をレヴィルに許可・委任したものである。「レヴィル氏が半分しか署名していない」というのは、そのことを指している。ソシュールはこの「署名」の問題に加え、「ある知識人」すなわちレヴィルの友人が、1894年11月1日から1898年1月10日までの間に次第にドレフュス派になってゆく、その「行程」を跡づける日記の「日付」を疑っている。ここでのソシュールの言い方はひじょうに微妙であり、括弧書きで「私はれっきとしたドレフュス主義者であるが」と言っているが、未来の「ドレフュスの勝訴」よりも、本当に日記が指示されている日付に執筆されたのかどうかという、過去の「真実」にまつわるきわめて微細な「細部」のほうを重要視しているように見える。もちろんソシュールは「日付」だけを疑っているわけではなく、指示されている日付よりもあとに書かれたとおぼしき日記が、「現実の出来事」を経験した当事者の記憶を忠実に再現しているのかどうかを疑っている。「ドレフュス主義者」の「知識人」となった独身の教授が数ヶ月前に書いた手記を前にして、たとえ自分自身が「ドレフュス主義者」であったとしても、「正義」のために「真実」を犠牲にしてはならず、「私<sup>(41)</sup>たちなし」の想像そのものが向き合わなければならない。ここには「詩趣喪失」の原理にもとづく「神話的人物」の脱神話化と同様の態度・精神が垣間見える。ドレフュス事件関連のものを含め、現在参照することのできるソシュールの「政治的言説」のほとんどは伝説・神話研究以前の「日付」をもっていることに鑑みると、ソシュールはまず同時代の政治的事件について、同時代の「韻文的年代記」ならぬ「散文的年代記」とでも言うべき新聞各紙を読み比べることによって、また場合によっては当該の記事を書いたジャーナリストに直接問い尋ねる手紙を書き送ることによって、その「真実」を探り出そうとし、しかるのちに

(41) Cf.『ソシュールの政治的言説』、98頁。

その方法論・手法を伝説・神話研究に応用した、と言えるかもしれない。このことについては機会をあらためて論ずることにする。

**付記** 本論は、2018-2020年度科学研究費補助金（基盤研究(C)「ソーシャルの伝説・神話に関する手稿の文献学的研究」、課題番号18K00480、研究代表者・金澤忠信）による研究成果の一部である。

### 参 考 文 献

※URLは2019年11月4日の時点で参照可。

- ARRIVÉ, Michel (2001) : «La sémiologie saussurienne entre le CLG et la recherche sur la légende», *Linx* 44, pp. 13-27. <<http://linx.revues.org/1015>>
- (2007) : *À la recherche de Ferdinand de Saussure*, PUF, Paris.
- (2012) : «De la lettre à la littérature : un trajet saussurien», *Linguiste et littérature* 1. *Saussure. En quoi Saussure peut-il nous aider à Penser la littérature?*, Presses de l'Université de Pau et des Pays de l'Adour, pp. 33-50. <<https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00817830/document>>
- AVALLE, D'Arco Silvio (1972) : «Dai sistemi di segni alle nebulose di dementi», *Strumenti critici* 19, 1972, pp. 229-242.
- (1973a) : «La sémiologie de la narrativité chez Saussure», *Essai de la théorie du texte*, Galilée, Paris, pp. 17-49.
- (1973b) : *L'ontologia del segno in Saussure*, Giannichelli, Turin.
- BÄHLER, Ursula (1999) : *Gaston Paris dreyfusard*, CNRS, Paris.
- BLUM, Léon (1935) : *Souvenirs sur l'affaire*, Gallimard, Paris. [レオン・ブルム, 『ドレフェス事件の思い出』, 稲葉三千男訳, 創風社, 1998年]
- BOUSSEL, Patrice (1960) : *L'affaire Dreyfus et la presse*, Armand Colin, Paris.
- CALVET, Louis-Jean (1975) : *Pour et contre Saussure*, Payot, Paris.
- CHARLE, Christophe (1990) : *Naissance des «intellectuels», 1880-1900*, Minuit, Paris. [クリストフ・シャルル, 『「知識人」の誕生 1880-1900』, 白鳥義彦訳, 藤原書店, 2006年]
- (1996) : *Les intellectuels en Europe au XIX<sup>e</sup> siècle*, Seuil, Paris.
- CLEMENCEAU, Georges (2001) : *L'inquiétude — L'affaire Dreyfus*, Mémoire du livre, Paris.
- (2009) : *Clemenceau — L'intégrale des articles de 1894 à 1906 publiés dans La Dépêche*, éd. dirigée par Georges MAILHOS et Rémy PECH, Privat/La Dépêche, Toulouse.
- DE MAURO, Tullio (1972) : «Notes biographiques et critiques sur F. de Saussure», tr. fr. Louis-Jean CALVET, *Cours de linguistique générale*, Payot, Paris. [トゥリオ・デ・マウロ, 『ソ

- シュール一般言語学講義」校注』, 山内貴美夫訳, 而立書房, 1976年)
- DREYFUS, Mathieu (1978) : *L'affaire telle que je l'ai vécue*, Bernard Grasset, Paris.
- DRUMONT, Édouard (1886) : *La France juive*, C. Marpon & E. Flammarion, Paris.
- DUCLERT, Vincent (1994) : *L'affaire Dreyfus, la Découverte*, Paris.
- ENGLER, Rudolf (1967-1968) : *Cours de linguistique générale*, édition critique, tome 1, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- (1974a) : *Cours de linguistique générale*, édition critique, tome 2, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- (1974b) : «Sémiologies saussuriennes — 1. De l'existence du signe», *Cahiers Ferdinand de Saussure* 29, Droz, Genève, pp. 45-73.
- (1980) : «Sémiologies saussuriennes — 2. Le canevas», *Cahiers Ferdinand de Saussure* 34, Droz, Genève, pp. 3-16.
- GANDON, Francis (2011) : *La morale du linguiste : Saussure entre Affaire Dreyfus et massacre des Arméniens (1894-1898)*, Lambert-Lucas, Limoges.
- GODEL, Robert (1957) : *Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale*, Droz, Genève.
- (1960) : «Inventaire des manuscrits de F. de Saussure», *Cahiers Ferdinand de Saussure* 17, Droz, Genève, pp. 5-11.
- GRIGORIUS EPISCOPVS TVRONENSIS [Grégoire de Tours] : *HISTORIA FRANCORVM*. [トゥールのグレゴリウス, 『フランク史——一〇巻の歴史』, 杉本正俊訳, 新評論, 2007年]
- 稲葉三千男 (1999) : 『ドレフュス事件とエミール・ゾラ 告発』, 創風社。
- 石川栄作 (1992) : 『『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容』, 郁文堂。
- (2001) : 『『ニーベルンゲンの歌』を読む』, 講談社学術文庫。
- (2004) : 『ジークフリート伝説——ワグナー『指環』の源流』, 講談社学術文庫。
- [訳] (2011) : 『ニーベルンゲンの歌』(前編・後編), ちくま文庫。
- JAURÈS, Jean (1898) : *Les preuves ; affaire Dreyfus*, La petite République, Paris.
- (2001) : «Les temps de l'Affaire Dreyfus (1897-1899)», *Œuvres de Jean Jaurès*, t. 6-7, Fayard, Paris.
- JULLIARD, Jacques & WINOCK, Michel (2002) : *Dictionnaire des intellectuels français — les personnes, les lieux, les moments*, sous la direction de Jacques JULLIARD et Michel WINOCK, Seuil, Paris.
- 金澤忠信 (2017) : 『ソシュールの政治的言説』, 月曜社。
- (2017) : 「凡庸さとありきたりなもの」, 『ユリイカ』「総特集・蓮實重彦」10月臨時増刊号, 青土社, 355-369頁。
- (2018) : 「ソシュールの伝説・神話研究」, 『21世紀のソシュール』, 松澤和宏編, 水声社, 155-170頁。

- KIM Sungdo (1990) : «Le Mythologue Saussure est-il encore Saussure ? — Essai d'interprétation sur la mythologie saussurienne», *Linx* 22, pp. 129-144. <[http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/linx\\_0246-8743\\_1990\\_num\\_22\\_1\\_1149](http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/linx_0246-8743_1990_num_22_1_1149)>
- (1995) : «La mythologie saussurienne : une ouverture sémiologique», *Linx* 7, pp. 293-300. <<http://linx.revues.org/1171>>
- LACHMANN, Karl (1841) : *Der Nibelunge Noth und Klage*, Berlin [reprint : Forgotten Books, 2018].
- LARUE-TONDEUR, Josette (2010) : «Saussure et le personnage mythologique», *Saussure et la psychanalyse*, Aug 2010, Cerisy-la-Salle (50), France. <<https://hal.archives-ouvertes.fr/halshs-00512239/document>>
- LE JAN, Régine (2006) : *Les mérovingiens*, «Que sais-je ?», n° 1238, PUF, Paris. [レジーヌ・ル・ジャン, 『メロヴィング朝』, 加納修訳, 白水社文庫クセジュ, 2009年]
- LYNN-GEORGE, Michael (2006) : «The Crossroads of Truth : Ferdinand de Saussure and the Dreyfus Affair», *MLN* 121, The Johns Hopkins University Press (Project MUSE), pp. 961-988.
- MIQUEL, Pierre (1959) : *L'Affaire Dreyfus*, «Que sais-je ?», n° 867, PUF, Paris. [ピエール・ミケル, 『ドレーフユス事件』, 渡辺一民訳, 白水社文庫クセジュ, 1990年]
- ORY, Pascal & SIRINELLI, Jean-François (1986) : *Les intellectuels en France, de l'affaire Dreyfus à nos jours*, Armand Colin, Paris.
- MUSSOT-GOULARD, René (1997) : *Clovis*, «Que sais-je ?», n° 3237, PUF, Paris. [ルネ・ミュソ＝グラール, 『クローヴィス』, 加納修訳, 白水社文庫クセジュ, 2000年]
- 岡崎忠弘 [訳] (2017) : 『ニーベルンゲンの歌』, 鳥影社。
- PIERSENS, Michel (1974) : «La Tour de Babil — Sur quelques aventures linguistiques», *Les deux Saussure (Recherches 16)*, CERFI, Fontenay-sous-Bois, pp. 65-89.
- PINHEIRO, Clemlton Lopes (2014) : «Les études de Saussure sur les légendes : un rapide parcours à travers quelques interprétations», *Congrès Mondial de Linguistique Française — CMLF 2014, SHS Web of Conferences*, pp. 479-490. <[http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf\\_cmlf14\\_01118.pdf](http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf_cmlf14_01118.pdf)>
- PROSDOCIMI, Aldo (1983) : «Sul Saussure delle leggende germaniche», *Cahiers Ferdinand de Saussure* 37, Droz, Genève, pp. 35-106.
- RASTIER, François (2009) : «Saussure et les textes — De la philologie des textes saussuriens à la théorie saussurienne des textes», *Texte !*, vol. XIV, n° 3. <[http://www.revue-texto.net/docannexe/file/2420/texto\\_saussure\\_et\\_les\\_textes\\_rastier.pdf](http://www.revue-texto.net/docannexe/file/2420/texto_saussure_et_les_textes_rastier.pdf)>
- RÉVILLE, Albert (1898) : *Les étapes d'un intellectuel — À propos de l'affaire Dreyfus*, P.-V. Stock, Paris.
- 相良守峯 [訳] (1955) : 『ニーベルンゲンの歌』 (前編・後編), 岩波文庫。
- SALMON, Gildas (2010) : «Les conditions d'une science de l'intertextualité : réflexion sur les

- apories du comparatisme saussurien.», *RIFL* 3, pp. 169-182. <<http://www.rifl.unical.it/index.php/rifl/article/view/114>>
- SAUSSURE, Ferdinand de (1879 [1878]) : *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Teubner, Leipzig.
- (1916) : *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Payot, Paris. [フェルディナン・ド・ソシュール, 『一般言語学講義』(改版), 小林英夫訳, 岩波書店, 1972年]
- (2003) : «Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan», présentation et édition par Béatrice TÜRPN, *Saussure*, L'Herne, Paris, 2003. [フェルディナン・ド・ソシュール, 「北欧の伝説と説話——ジークフリートからトリスタンまで」, ベアトリス・テュルパン編, 『伝説・神話研究』, 金澤忠信訳, 月曜社, 2017年]
- STAROBINSKI, Jean (1971) : *Les mot sous les mots — Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Gallimard, Paris. [ジャン・スタロバンスキー, 『ソシュールのアナグラム』, 金澤忠信訳, 水声社, 2006年]
- 菅原邦城 [訳・解説] (1979) : 『ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ』, 東海大学出版会。
- THIERRY, Amédée (1856) : *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, vol. 1, Didier, Paris.
- THIERRY, Augustin (1840) : *Récits des Temps Mérovingiens*, Librairie Garnier Frères, Paris. [オーギュスタン・ティエリ, 『メロヴィング王朝史話』(上・下), 小島輝正訳, 岩波文庫, 1992年]
- TÜRPN, Béatrice (2003) : «Légendes — Mythes — Histoire. La circulation des signes», *Cahier Saussure*, L'Herne, Paris, pp. 307-316.
- WINOCK, Michel (1997-1999) : *Le siècle des intellectuels*, Seuil, Paris. [ミシェル・ヴィノック, 『知識人の時代——バレス/ジッド/サルトル』, 塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳, 紀伊國屋書店, 2007年]
- (1998) : *L'affaire Dreyfus*, présentation par Michel WINOCK, Seuil, Paris.
- WUNDERLI, Peter (1972) : *Ferdinand de Saussure und die Anagramme*, Niemeyer, Tübingen.